

Ⅲ キリスト教思想史の諸問題

<前回> キリスト教神学の成立とその諸問題

1. 宗教運動から制度的宗教・教会へ（パウロの位置）
2. 制度化の必然性と問題点 → 制度批判＝反動・異端運動
一定の硬直化をよぎなくされる（形式主義、官僚性）
平等主義の後退 → 階層制度（ヒエラルキー）
3. 迫害：66(ネロ帝)、95 頃(ドミティアヌス帝)、249(デキウス帝)、303(ディオクレティアヌス帝)
・キリスト教の制度化は着実に進行 → 正統教会への道
・古代地中海世界の都市の文化状況への適合 → 都市型宗教としてのキリスト教
4. キリスト教迫害（ユダヤ教とローマ帝国からの）への対応
(1) 弁明（弁証）→ キリスト教思想の形成
→ 学問としてのキリスト教神学の成立
キリスト教の弁証と議論の基盤としての自然神学
(2) 国家批判：ローマ帝国＝サタンの王国
5. キリスト教の公認と国教化
313：ミラノ勅令（コンスタンティヌス大帝）、325：ニケア公会議、381：コンスタンティノポリス公会議、392：国教(テオドシウス帝)
6. 政治的秩序と宗教的秩序の相補性、国家神学・政治神学としてのキリスト教神学
ストアの神学体系（神話・民衆神学、ポリス・国家神学、自然・哲学的神学）と新しい神学類型としてのキリスト教神学（キリスト論あるいは三位一体論）
7. 絶対平和主義（軍隊の宗教性）から正戦論（アウグスティヌス）へ、そして聖戦論へ

第3講 中世キリスト教と宗教改革

1 自然神学と12世紀ルネサンス

(1) 中世社会の構造と動態

1. 西欧中世と時代区分

ドウソン：起源の時代（～5世紀）、発展の時代（5～10世紀）、
開化の時代（10世紀～）

時代区分とは、基本的に研究者・解釈者が設定する視点に依存したものであり、客観的な線引きが必ずしも可能なわけではない。たとえば、アウグスティヌスは古代末期と中世初期のいずれにも位置付けうるし、またルターは中世末期あるいは近代初期のいずれに属するとの説も可能である。

2. 中世社会の力学：教会と国王、都市と農村、キリスト教とイスラーム

中世という時代は、1000年を超える、キリスト教史でもっとも長い時代であるが、

決して単調な停滞した時代ではない。むしろ、実態は逆であり、そこには様々なレベルにおいてダイナミックな動きが存在している（中世は面白い）。

このダイナミズムを動かしている要因として、政治と経済における内的要因と、外的要因を挙げることができる。

内的要因：教会と国王（政治的要因、国教化体制内部での変動要因）

都市と農村（経済的要因、都市のキリスト教と周辺に存在する異教的要素）

外的要因：イスラム世界との関わり

3. キリスト教のダイナミズム

古代に始まった制度化は、徹底的平等主義や絶対平和思想の後退をもたらしたが、しかし、イエス運動の宗教理念は作用し続けている。ここにキリスト教世界の基本的なダイナミズムが成立する。

4. 中世社会の変動と新しい宗教性の展開

・農業革命 → 都市の発展

中世世界においては、10世紀頃までには農業技術の伸展などによって（そして、気候の温暖化）、農業生産は大きく増大した。農業生産の増加は、余剰農産物の流通を促し、これにさらに地方の特産物の登場によって、農産品取引の活性化をもたらした。この商業の発展は、その活動の拠点となる中世都市の隆盛を帰結する。

・都市民衆の宗教性

都市は古代以来、キリスト教が発展する主要な場となってきたが、同時に都市は、人、物、情報の集積・交換の拠点であることから、新しい文化活動・思想の舞台となる（→中世の大学）。その新しい思想動向には、経済的な豊かさと時間的ゆとりを背景に主体的な精神文化を要求する都市住民が存在し、都市民衆の求める宗教文化の中には、伝統的なキリスト教から見て、異端的と判断されるものも少なからず見いだされることになった。

・異端的民衆運動と教会の対応

都市における異端的思想は、周辺の農村や封建領主をも巻き込むようになると、しばしば巨大な異端運動に発展することになり、その鎮圧のために十字軍が出動することにもなった（アルビジョア十字軍）。教会は、都市の発展がもたらした新しい宗教性の展開に対応するために、新しい修道院運動（ドミニコ会、フランシスコ会）を公認するようになる。

5. 中世科学の発展：中世は暗黒時代ではない

古代ギリシャの自然学（古代科学）は、ゲルマンの民族移動や西ローマ帝国の滅亡に伴った混乱期において、東ローマ帝国、そしてペルシャ帝国へと受け継がれ、イスラーム世界において大きく発展することになる。この当時の最先端の科学であったイスラーム科学がイスラームとキリスト教世界の接点となった地域（イベリア半島など。平和的共存と軍事的接触）などを介して中世ヨーロッパ世界にもたらさせることによって、中世における「12世紀ルネサンス」が開花した（イスラームの科学文献の翻訳拠点としてのイタリアやスペインの修道会）。13世紀になると、大学（たとえば、パリとオックスフォード）を拠点に独自の中世科学が展開し、後の近代の科学革命の基盤となる。この時期、キリスト教は科学の積極的な担い手であった。

(2) 自然神学と知の宇宙としての大学

6. 「キリスト教と文化」の関係についての類型論 (ヘルムート・R・ニーバー)

キリスト教と世俗文化との関係性をめぐっては、これまで多くの議論がなされてきたが、ニーバーの類型論はその古典的な研究といえる。

断絶・対立／連続性／

中間 (差異を前提とした関係付け。階層性、緊張、回心・変革)

中世世界は、階層性によるキリスト教と文化との統合 (スコラ的な文化総合) を生み出し、こうして成立した階層秩序は、1000 年間を超える中世世界の安定性をもたらした。

7. スコラ的な文化総合

階層的秩序：自然と超自然の区別と調和、一般的な日常性の倫理 (世俗的価値と妥協) とキリスト教的純粋な倫理性との二重構造。

| | |
|-------------------------|-----------------|
| キリスト教的全体秩序 (キリスト教世界) | 超自然・恩恵・啓示、修道院 |
| | 自然、世俗文化、一般的な日常性 |

8. 二つの書物、啓示神学と自然神学

神についての知識の獲得に関わる二つの道

神の啓示、とくに聖書テキストに基づく神学 = 啓示神学

人間の自然的理性 (理性本性) の能力による神認識 = 自然神学

創造論 → 世界は神の被造物、その中には人間理性が理解可能な合理的な秩序・法則が存在する (知恵思想)。

→ 科学的探究は神の偉大な創造行為を讃美する宗教的に意義ある行為 (以下引用の詩編19編を参照)

類比 (アナロギア) の論理：作品から作者への推論

神：人間 = 父：子 → 神 = (人間 × 父) ÷ 子

9. 無神論者も異教徒も、神の律法の知識に制約されている (「知らなかったから罪はない」との理屈は通用しない)。

「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物において現れており、これを通して神について知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。」(ローマの信徒への手紙 1.20)

10. 自然神学：世界の秩序の探求から神へ

(1) 前提：古代ギリシャの自然学と哲学的神学、旧約聖書の創造論と知恵思想
ヘレニズム的ユダヤ教：「無からの創造」の背景

(2) 神の存在論証

(a) 存在論的類型：アンセルムス、デカルト、ヘーゲル

無限者の観念の存在から、神の現実存在を論証する。

(b) 宇宙論的類型：トマス (5つの道)、ニュートン、人間原理

- ・経験的事実から神へ（因果律、目的論）
- ・運動・変化の存在／「原因—結果」の連鎖／第一原因
→これを神と呼ぶ

11. 中世の統一的な知の世界（神の創造した合理性の客観化）

神学（啓示神学）／神学（自然神学）／哲学／自然学・諸科学

自然神学は、人間の理性的営みの対象である諸科学と、啓示に基づくキリスト教神学とを合理的な推論によって架橋するものであり、これが媒介項となって、諸科学は一つの知的世界を構成することになる。ここに中世における「大学」の理念が成立した。

<詩編 19 編>

- 1 【指揮者によって。賛歌。ダビデの詩。】
- 2 天は神の栄光を物語り／大空は御手の業を示す。
- 3 昼は昼に語り伝え／夜は夜に知識を送る。
- 4 話すことも、語ることもなく／声は聞こえなくても
- 5 その響きは全地に／その言葉は世界の果てに向かう。そこに、神は太陽の幕屋を設けられた。

(3) 歴史的思惟の形成

自然神学とそれが支える統一的な知的宇宙は、中世のスコラ的な文化統合の実例であるとともに、中世社会の構造を映し出したものと解することができる。しかし、構造的な安定性に優れた中世世界も、よい大きなマクロレベルの変動の中にあったと言わねばならない。

こうした歴史のマクロな動向に関しても、中世の思想世界は独特の思想を生み出した。とくに、近代以降の歴史哲学への影響において特筆すべきは、フィオーレのヨアキム（1130 頃～ 1202）の歴史論である。

12. 聖書解釈から歴史理論へ

三位一体論：内在的 → 経綸的・歴史的

- ・神が歴史を支配する
- ・聖書がそれを語っている

三位一体という内的構造を有する神は、歴史を支配する神（摂理と予定）であると解されているが、その神の歴史支配（神の経綸）は、神の内的構造を反映し、それと同型であると考えることができる。こうして、歴史のプロセスが三位一体的な構造を持つという歴史理解が帰結し、それを聖書の歴史記述から再構成することが試みられた。

13. ヨアキムの歴史解釈とその射程

- ・父の時代／子の時代／聖霊の時代という三段階で歴史は進展する。
- ・三つの時代の相互内在 → 歴史の弁証法

歴史プロセスは単純な時代区分によって区切られる諸段階からなるのではない。、前の段階は次の段階への萌芽を含み、また前の段階は次の段階の中にまで入り込むという、いわばオーバーラップ部分によって相互に重なり合った諸段階となる。

古代末期には中世初期であり、中世末期は近代初期である。古代の影響は中世を

超えて近代内部にも作用する。これは、ヘーゲルやマルクスの歴史理論（弁証法）に受け継がれていると言える。

・未来としての聖霊の時代

ヨアキムは、自らの生きた時代を、子の時代から聖霊の時代への移行が顕在化する時代であると述べたが、これは、子の時代の担い手である教会から、新しい時代の担い手である修道会への移行をも含意するものであり、現時点での教会的秩序（国教会的体制）が終わりを告げ、新しい歴史的秩序が始まるという革新的な歴史理解として解釈できる。

14. 黙示的終末論の再興

千年王国論のインパクト → 農民戦争から近代の革命思想へ

<参考文献>

1. C・ドウソン 『中世のキリスト教と文化』 新泉社
2. E・ジルソン 『中世哲学の精神 上下』 筑摩書房
3. 稲垣良典編 『教養の源泉をたずねて』 創文社
4. 今野國雄 『修道院—祈り・禁欲・労働の源流—』 岩波新書
5. 堀米庸三 『正統と異端—ヨーロッパ精神の底流』 中公新書
6. 伊東俊太郎 『近代科学の源流』 中央公論社
『一二世紀ルネサンス 西欧世界へのアラビア文明の影響』 岩波書店
7. ヘルムート・H・ニーバー 『キリストと文化』 新教出版社
8. 芦名定道・小原克博 『キリスト教と現代 終末思想の歴史的展開』 世界思想社